The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか：〈存在〉という意味成分に基づく再検討
Author(s)	今井, 忍
Citation	日本語・日本文化. 2012, 38, p. 53-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5924
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究論文〉

なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか[1)]

――〈存在〉という意味成分に基づく再検討――

今井　忍

1. はじめに

本稿では、日本語の「多い」と「少ない」という二つの形容詞の構文上の特徴について意味的観点から分析を行う。従来の研究においては、これらの二つの形容詞が連体修飾の位置に立つとその文が容認不可能になるという現象がしばしば指摘されてきた（仁田 2010、寺村 1991、木下 2004）。

（1）a. * 多い人が庭に集まっている。　（仁田[2)] 2010: 79）

b. * この辺は多い映画館がありますね。　（寺村 1991: 260）

（2）a. * 少ない本がある。　（仁田 2010: 81）

b. * きのう電車事故があって、すくない人がけがをしました。

（寺村 1991: 260）

この現象に対して、仁田（2010: 82）は「「多イ」や「少ナイ」の表している〈数〉にしても、（中略）これらは、共に「物」が内在的に有しているあり方の一類型ではない」と述べて、これらの形容詞が被修飾名詞の内在的な性質を表していないという点にその原因を求めている。寺村（1991: 264）でも「「多イ」「少ナイ」というのは、ある時、ある所に存在する物の数量について評価することばであって、「大キイ、古イ、シャレテイル（シャレタ）」のようにその存在する物の（他と比べての）形状や状態や性質を述べることばではない」とされ、被修飾名詞を同種の他の物と区別するような形容になっていないという理由で「多い」「少ない」の連体修飾が不可能であると分析されている。

（1）と（2）だけを見れば、「多い」「少ない」の連体修飾用法は一般に成り立

たないように見えるが、必ずしもそうではない。上記の先行研究では、場合によっては連体修飾の「多い」「少ない」が容認されることが指摘されている。

(3) a. 多い資源だからといって無駄に使ってはいけない。　（仁田 2010: 86）
　　b. この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です。　（寺村 1991: 264）
　　c. 少ない資源を大切にしよう。　（仁田 2010: 86）

詳細については第2節で述べるが、仁田（2010: 89）は、このような例が「単に外在・外延的なあり方からの限定ではない」ために可能となると述べている。一方、寺村（1991: 264）は、(3) b のような例では「多い」の用法が「範囲を限定してその特徴をいう」という形容詞の連体用法の特徴に合致するために可能になると述べている。木下（2004）は、基本的に寺村（1991）の分析に従いつつも、「範囲限定の品定め」を「比較対照の明示化」という観点から規定しなおすことによってより一般的な説明を試みている。

これらの分析はいずれも、連体修飾の位置に立つ「多い」「少ない」が、他の形容詞と異なり被修飾名詞の形状や性質などの内在的特徴を表せないということから連体修飾用法の不自然さを説明しようとしている点で共通している（このような説明を以下では「内在的形容説」と呼ぶことにする）。

しかしながら、内在的形容説では一つの重要な問題が見過ごされている。それは、上のような意味規定に合致する語が他にもあるという点である。例えば、「おびただしい」「膨大な」「希少な」「わずかな」などは、「多い」「少ない」と同様に数量の多寡を表しており、その点で上の意味規定に合致している。したがって、それらが「多い」「少ない」と同じ性質を示すかどうかが内在的形容説の妥当性に決定的に関与することになる。

ところが、実際に検証してみると、これらの形容詞類については連体修飾用法が問題なく容認される。

(4) a. {* 多い／おびただしい} 人が庭に集まっている。
　　b. 国会図書館には {* 多い／膨大な} 書物がある。
　　c. アフリカには {* 少ない／希少な} 資源がある。
　　d. {* 少ない／わずかな} 金を巡って醜い争いがあった。

もし「多い」「少ない」の連体修飾用法の不自然さが形状・性質を形容しないと

いう特徴に起因するとすれば、(4) のように「おびただしい」「膨大な」「希少な」「わずかな」が「多い」「少ない」とは異なり連体修飾用法が可能である以上、これらは被修飾名詞の形状・性質を形容しているという結論が導かれるが、これは明らかに直感に反する。

したがって、内在的形容説には欠陥があり、異なった観点からの説明が必要となる。本稿は、そのような説明の一つの試みである。具体的に言えば、「多い」「少ない」の連体修飾用法の不自然さは「多い」「少ない」に含まれる存在という意味成分に起因するというのが本稿の主張である。

以下では、次のような手順で論を進める。まず、先行研究として仁田（2010）、寺村（1991）、木下（2004）の分析を紹介し、それらの不備を指摘する。次に、「多い」「少ない」と存在動詞「ある」「いる」との類似性を、存在文の述語としての使用の可否、出来事存在文における生起の可否、存在文における存在物に対する連体修飾の可否という3つの観点から検証し、「多い」「少ない」に存在の意味が含まれることを確認する。そして、先行研究で挙げられた「多い」「少ない」が連体修飾位置で使用可能な場合について、「ある」「いる」との分布の平行性を指摘し、「多い」「少ない」に存在の意味が含まれるという仮説を補強する。さらに、本稿の仮説にとって一見反例となる「豊富な」と「潤沢な」について検討し、それらが反例とはならないと主張する。最後に、「多い」「少ない」に存在の意味が含まれる原因について推測を述べる。

本論に進む前に、以下で使用する用語を導入しておく。日本語の形容詞の用法には以下の例に見られる2種類がある。

(5) a. <u>高い</u>山

b. 山が<u>高い</u>

(5) a では、形容詞「高い」が「山」を修飾する位置にあり、全体として一つの名詞句を形成している。一方、(5) b では、「高い」は文の述語の位置にあり、主語「山が」とともに全体として一つの文を形成している。本稿では、仁田(2010)、寺村（1991）、木下（2004）に従い、前者を「装定用法」、後者を「述定用法」と呼ぶことにする。また、本稿では、「多い」「少ない」とそれに類似した意味を持ついくつかの形容詞・形容動詞を比較対照する。具体的には、「おびただしい」「膨

大な」「豊富な」「潤沢な」「希少な」「わずかな」である。これらを「多い」「少ない」の「類義語類」と呼ぶことにする。

2. 先行研究

2.1. 仁田（2010）

仁田（2010）は、英語と異なり日本語の形容詞は「陳述の力」を持っているため、述定として用いることができるが、装定用法がその本来的なものであると述べている。したがって、日本語の形容詞は述定用法と装定用法の両方で使うことができるというのが基本的なあり方であるとする。ところが、「多い」「少ない」は、「* 多い人が庭に集まっている」や「* 少ない本がある」が不自然であることからわかるように、連体形による装定用法を持たないという点で特異であると述べている。

仁田（2010）は、装定用法を持たない形容詞として「遠い」と「近い」も挙げているが、本稿ではこれらの形容詞を考察対象としないため、説明は割愛する。ただし、「多い」「少ない」「遠い」「近い」に共通する意味的特徴として、「これらは、共に「物」が内在的に有しているあり方の一類型ではない。「物」が存在する時に帯びる外在的なあり方の一類型である」（仁田 2010: 82）と述べている点は重要である。

このように、「多い」「少ない」は装定用法を持たない点で特殊であるが、すべての場合において装定用法が不可能だというわけではないとされる。「多い」「少ない」の装定用法が可能な場合として、大きく分けて2通りの場合が挙げられている。

(6) a. しらがの多い女の人が歩いてきた。

b. 少ない資源を大切にしよう。

(6) a において数量の多寡が問題になっているのは、被修飾名詞句の「女の人」ではなく、連体修飾節の中の名詞句「しらが」である。このような場合には「多い」「少ない」の装定用法が一般に容認可能になるが、本稿ではこの構文については考察しないため、説明は割愛する。一方、(6) b のような用法について、仁田（2010: 87）は次のように述べている。

たとえば、(1)（＝（6）b、引用者注）について考えれば、主要語である「資源」が量といったカテゴリに属する性質・属性を自らの内在的な性質・属性として含んでいるものとして扱われている。(1) の「少ナイ資源」は、［埋蔵量ガ少ナイ資源］とでもいった意味であり、「少ナイ」は、量といった観点からの限定であり、そして、その埋蔵量といった性質・属性は、主要語「資源」が内在的に有していた性質・属性であるということになる。

さらに、以下の２つの例を対比し、「多くの」による修飾が外在的な数に関する限定であるのに対し、「多い」による修飾はそうではないことを示しているとしている。

（7）a. 多くの資源を無駄に使った。

b. 多い資源だからといって無駄に使ってはいけない。

（7）a が、石油や石炭や鉄といった数多くの資源を無駄に使ったという意味であるのに対し、（7）b にそのような意味がないことから、仁田（2010）は（7）b の「多い」は被修飾名詞の内在的性質を限定していると主張している。

このような検討の結果、仁田（2010: 90–91）は以下のように結論づけている。

以上の事から、形容詞（特に属性形容詞）による名詞の限定化（つまり、形容詞を連体結合の連語の規定語とする場合）は、主要語が本来的に内包していると考えられる性質・属性を引き出すといった形で行われるという意味論的なあり方を取っているものと言えそうである。（中略）

「多イ」などは、意味論的にそういった限定化を取れないために、連体形による装定用法を持たないものと思われる。そのため、「多イ」「少ナイ」や「遠イ」「近イ」は、通常の形容詞が取る、述定から装定へといった通常の装定化を持たないことになる。

仁田（2010）の主張は、次のようにまとめられるだろう。「多い」「少ない」は物の外在的性質を表す形容詞であり、内在的性質を表さない。一方、装定用法は被修飾名詞の内在的性質を限定するものである。このように、「多い」「少ない」

の意味と装定用法が持つ意味的特徴が衝突するため、これらの形容詞の装定用法が不自然になるという。「多い」「少ない」の装定用法が可能である場合については、文脈上「多い」「少ない」が被修飾名詞の内在的性質を限定していると解釈されるからだと仁田（2010）は説明している。

2.2. 寺村（1991）

「多い」「少ない」に関する寺村（1991）の分析は、以下の通りである。まず、外国人学習者の作文で以下のような誤用が見られることを指摘する。

（8）a. この辺は多い映画館がありますね。

b. きのう電車事故があって、少ない人がけがをしました。

そして、このような文が日本語として不自然である理由として、形容詞の装定用法の特性とこれらの形容詞の意味的な不整合を挙げる。

通常、形容詞の述定用法には2つの用法があるとされる。一つは「印象描写」用法であり、これは、ある事物のそのときの印象を表したものである。例えば、ある力士を間近に見て「大きいな！」という場合、これはその力士の印象を表す様々な形容詞「ハンサムだ」「強そうだ」「怖そうだ」「やせている」「老けている」などに対立する形で「大きい」が選ばれているという。それに対して、もう一つの用法として「範囲限定の品定め」を挙げる。これは、ある事物の特徴を述べる場合、その対象が属する種の平均を基準として、その程度の大小を言うために使われるような用法である。例えば「この蟻は大きいなあ。」という場合や「この靴はちょっと（私には）大きい。」というような場合である。

一方、述定用法とは異なり、装定用法には「範囲限定の品定め」の解釈しかない。例えば、「大きい相撲取りはどうしても動きがにぶい。」「小さい蟻がいる。」「安いダイヤモンドが一つほしい。」などである。

寺村（2011: 264）は、このような形容詞の解釈のあり方に基づき、「多い」「少ない」の特殊性について次のように述べている。

> 「多イ」「少ナイ」というのは、ある時、ある所に存在するものの数量について評価することばであって、「大キイ、古イ、シャレテイル（シャレタ）」

のようにその存在するものの（他と比べての）形状や状態や性質を述べることばではない。「映画館ガ多イ」というのは、「映画館」の形状でもなければ特徴でもない。映画館を「多イ」「少ナイ」ということで他の映画館と区別することはできない。考えてみれば特異な形容詞である。だから被修飾名詞について、同種のもののなかで、範囲を限定してその特徴をいうのが本来の連体用法には使えないのであろう。

このように考えると、以下のような例が容認されるのは、「多い」「少ない」に何か限定する語が付くことによって、「範囲限定の品定め」の解釈が可能になるからである、という。

(9) a. いちばん多い誤りは冠詞の使い分けです。

b. この辺りは大阪でいちばん映画館が多い所です。

c. この辺りではどんな事故が多いですか。

——そうですね、この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です。

d. 消費税が実施されてからどんな苦情がよくきますか。

——いちばん多い苦情は、日常品が高くなって贅沢品が安くなっていることのようです。

以上をまとめると、寺村（1991）は、「多い」「少ない」の装定用法が不自然であるのは、「範囲限定の品定めの解釈にしかならない」という連体修飾一般の特徴が「ものの形状や状態や性質を述べない」という「多い」「少ない」の意味的特徴と整合しないことによると主張していると言えよう。

2.3. 木下（2004）

木下（2004）は、「多い」と「遠い」の装定用法について考察した研究である。本稿では、特に「多い」についての分析の部分を紹介する。

木下（2004）は、「多い」は範囲限定の品定めとして解釈できる場合にのみ装定用法が容認されるという寺村（1991）の分析に基本的に依拠している。異なる点は、「範囲限定」という概念を「比較対象の明示化」という概念に置き換えたところにある。木下（2004: 29）は、以下のような例を挙げて、「比較対象の明示

化」という規定によって「範囲限定」より妥当な説明を与えられると述べている。

（10）灯のない街に昼間より多い人が出ている。

このとき、人数の多少を判断する際の基準が、昼間の人数であることが文脈として明示されている。このような「多い」の装定用法を説明するために、「範囲限定」という過程を想定する必要はなく、比較対象そのものが直接的に示されたと考えれば十分である。つまり、「昼間より」が付加されることにより、昼間の人と夜の人とに範囲が限定されるというよりは、比較対象それ自体が直接示されたと考えたほうがよい。

さらに、このような規定により、相対形容詞であるという「多い」の性質とも関連づけて考えることができると述べている。すなわち、「丸い」のような絶対形容詞とは異なり、「多い」は比較という操作を経なければ量の多少を判断する事はできないという。（10）の例は、そのような比較における基準を明示した場合であり、そのような場合にのみ「多い」が装定用法として使われるとされる。

また、「多い」が被修飾名詞の属性を表す場合に装定用法が可能になるという仁田（1980）の分析を紹介し、自説との異同を論じている。確かに、「多い」の比較対象が明示化されることで、被修飾名詞に集合（類）としての解釈が生じ、その結果その集合に対する数量的属性の記述になると言えるかもしれないが、以下のように本来的に集合を表す「人々」「人たち」を使用しても、比較対象が明示されないことから、「多い」の装定用法が可能になるのは属性の解釈よりも比較対象の明示化のためであると木下（2004）は述べている。

（11）a. * 多い人々が庭に集まっている。

b. * 多い人たちが庭に集まっている。

木下（2004）の主張は、基本的に寺村（1991）の分析に沿うものと言ってよいだろう。ただし、その主眼は寺村（1991）の「範囲限定」を「比較対象の明示化」に置き換えることで「多い」の相対形容詞としての性質と結びつけて現象を捉える点にある。

2.4. 先行研究の問題点

ここでは、仁田（2010）、寺村（1991）、木下（2004）の3つの先行研究を挙げて、それぞれの分析を概観した。これらは、それぞれ用語は異なるものの、「多い」「少ない」の装定用法の不自然さを同じ事実に基づいて説明しようとしている。それは、これらの形容詞が被修飾名詞の内在的性質を表さないという事実である。このことは、仁田（2010: 82）の「多い」「少ない」の意味に関する「これらは、共に「物」が内在的に有しているあり方の一類型ではない」という指摘、寺村（1991: 264）の「「多イ」「少ナイ」というのは、（中略）その存在するものの（他と比べての）形状や状態や性質を述べることばではない」という指摘から明らかである（木下2004はこの点に関して寺村1991に同調している）。前述のように、本稿ではこのような共通点に着目し、「多い」「少ない」の装定用法の不自然さを内在的な性質を表さないという点に求める説明の仕方を「内在的形容説」と呼ぶことにする。

しかしながら、内在的形容説には大きな問題点がある。それは、「多い」「少ない」以外の数量を表す形容詞・形容動詞を考慮に入れていない点である。数量の多寡を表す「おびただしい」「膨大な」「豊富な」「潤沢な」「希少な」「わずかな」については、「多い」「少ない」が許容されない環境においても、問題なく使用することができる。

(12) a. {* 多い／おびただしい} 人が庭に集まっている。
b. 国会図書館には {* 多い／膨大な} 書物がある。
c. 倉庫には {* 多い／豊富な} 食料がある。
d. そのプロジェクトには {* 多い／潤沢な} 予算が配分された。
e. アフリカには {* 少ない／希少な} 資源がある。
g. {* 少ない／わずかな} 金が大きなトラブルの元になることがある。

もし被修飾名詞の内在的な性質を形容できない場合に装定用法が不自然になると仮定するならば、(12) における類義語類の装定用法が自然であることから、これらの類義語類は被修飾名詞の内在的な性質を形容していると結論づけざるを得なくなってしまう。しかし、そのような帰結は不自然であり、少なくとも何らかの別の方法でそれが示されない以上、ある形容詞の内在的な性質を形容しないという特徴とそれが装定用法を持たないという事実が相互依存的となり循環論に

陥ってしまう。

このことから、本稿では、仁田（2010）、寺村（1991）、木下（2004）の内在的形容説を棄却し、「多い」「少ない」とその類義語類の振る舞いの違いをより適切に説明できる分析を提示する。具体的に言えば、「多い」「少ない」はその意味の一部として存在という意味を含むのに対し、それらの類義語類には存在の意味が含まれないという仮説に基づく分析である。以下では、この仮説を検証していくことにする。

3. 「多い」「少ない」と「ある」「いる」との類似性

本節では、「多い」「少ない」が「ある」「いる」と平行的であり、「多い」「少ない」の類義語類や他の形容詞にはそのような平行性が見られないことをいくつかの文法的特徴に基づいて観察する。この事実から、本稿では、「多い」「少ない」には存在の意味が含まれており、それによって「多い」「少ない」の特異的な振る舞いが説明できると主張する。特に、従来注目されてきた「多い」「少ない」の装定用法の不自然さは、このような要因によるものと考えれば自然に説明できる。このことを示すためには、「多い」「少ない」と「ある」「いる」があらゆる文脈において類似した振る舞いをすることを示す必要があるが、さしあたり本節では存在文に関連する3つの構文について観察する。その他の文脈については、第4節で検討する。

3.1.　存在文の述語としての生起

本稿における「存在文」は（13）のような形式を持ち、文全体としてある場所における事物の存在を表す（14）のような文を指す。

（13）［場所］に（は）［存在物］が［述語］

（14）a. 部屋にテレビがある。

b. コンビニに客がいる。

c. 冷蔵庫にビールが冷えている。

d. グラウンドにポールが立ててある。

この構文の述語として現れる最も典型的なものは、（14）a,b のように存在動詞「ある」「いる」であるが、野村（2003）や Ostrovskaya-Nemkovich（2011）でも指摘

されているとおり、(14) c,d のように「動詞＋ている」「動詞＋てある」の形式も生起できる。さらに、本稿の主張にとって重要なのは、この構文の述語として「多い」「少ない」が生起できることである。

(15) a. 心斎橋に高級店が多い。
b. 駅の近くに居酒屋が多い。
c. この辺りにはコンビニが少ない。
d. 休日のキャンパスには学生が少ない。

通常、存在文の述語として形容詞が現れることがないという事実を考えると、「多い」「少ない」のこのような性質は特殊である。

(16) a. * チベットには山が高い。
b. * 冷蔵庫にビールが冷たい。
c. * 本棚に辞書が分厚い。
d. * 隣の家に犬が怖い。

さらに注目すべきは、「多い」「少ない」の類義語類の多くもこの構文に生起しないということである。

(17) a. * 境内には参拝客がおびただしい。
b. * この倉庫には書物が膨大だ。
c. ?? この地域には資源が希少だ。
d. * 冷蔵庫には食料がわずかだ。

ただし、「豊富だ」「潤沢だ」については、以下のように存在文で使用することができるが、この点については第5節で述べる。

(18) a. この国には資源が豊富だ。
b. IT 企業には資金が潤沢だ。

このことは、「多い」「少ない」はその類義語類やその他の形容詞とは基本的に異なった意味的特徴を持っていることを示している。さらに、それは存在動詞「いる」「ある」と共通した特徴であると考えられる。

3.2. 出来事存在文での生起

「多い」「少ない」と存在動詞の第2の共通点として、出来事存在文での生起が

挙げられる。動詞「ある」には物の存在ではなく出来事の生起を表す用法がある。その場合には、以下のような構文をとる。

（19）［場所］で（は）［出来事］が［述語］

（20）a. この部屋で会議がある。

b. 小学校で運動会がある。

ここでは、（19）の構文を「出来事存在文」と呼び、（13）のような構文と区別する。前節では、（13）を単に「存在文」と呼んだが、（19）と特に区別する必要がある場合にはこれを「事物存在文」と呼ぶことにする（区別する必要がない場合には、「存在文」は「事物存在文」を指すものとする）。出来事存在文は、ガ格名詞句に出来事を表す名詞句をとり、デ格にはその出来事が生起する場所を表す名詞句をとる。

出来事存在文は、事物存在文より生起できる述語が限られている。Ostrovskaya-Nemkovich（2011）は、本稿で言う事物存在文の述語として動詞のテイル形が表れる構文を扱っているが、その構文に表れることのできる動詞として以下の23が挙げられている。

（21）上がる　集まる　現れる　落ちる　降りる　隠れる　重なる　転がる
下がる　倒れる　立つ　たまる　散る　詰まる　積もる　できる
出る　とまる　並ぶ　昇る　乗る　入る　寄る

しかし、これらの動詞は出来事存在文では生起できない。

（22）a. * この部屋で会議が集まっている。

b. * 小学校で運動会が並んでいる。

c. * この交差点で事故が転がっている。

以下のような文は容認可能であるが、これは出来事存在文ではなく、単に進行中の出来事や過去の出来事を表す通常の文に過ぎない。

（23）a. この部屋で会議が進行している。

b. この交差点でよく事故が起こっている。

このように、出来事存在文は事物存在文に比べて生起できる述語に強い制約がかかるが、それにもかかわらず、「多い」「少ない」は出来事存在文の述語になることが可能である。

（24）a. 日本では、不順な天候によって引きおこされる災害が多い。
（KOTONOHA[3)]）
b. アラスカではムースとの衝突事故が多い　（KOTONOHA）
c. 大阪ではいいコンサートが少ない。
d. この地域では窃盗事件が少ない。

ところが、事物存在文では生起可能であった「豊富だ」「潤沢だ」は、出来事存在文での生起が許されない。

（25）?? パリではいいコンサートが｛豊富だ／潤沢だ｝。

本来的には、出来事存在文の述語は「ある」であると考えられるが、それ以外の述語で出来事存在文に生起できるのは「多い」「少ない」しかないという事実から、存在動詞と「多い」「少ない」は極めて類似した性質を持つと言える。

3.3. 存在文における［存在物］への連体修飾の可否

この節では、主節が存在文の場合に、存在物に対して「ある」「いる」や「多い」「少ない」を使って修飾する場合の文の容認可能性を観察する。そのために、まず連体修飾節における「ある」「いる」について、金水（2006）の主張を批判的に検討しながら特徴づける。次に、「多い」「少ない」及びその類義語類が同じ環境でどのような性質を示すかを観察する。

3.3.1. 「ある」「いる」による連体修飾

まず、「ある」「いる」を述語とする節が［存在物］を修飾する場合について概観しておく。金水（2006: 39）は、「主語を主名詞とする連体修飾節に含まれる存在文は存在Ⅱ、すなわち空間的存在文」であると述べている。金水（2006）では、空間的存在文では必ず二項存在動詞が使われるとされており、したがって、主語を主名詞とする連体修飾節には必ず場所名詞句が含まれなければならないことになる。

（26）a. 隣の部屋にいる男の人（金水 2006: 39）
b. 図書館にある本
c. 家庭にある食材

しかしながら、以下のような例の場合、連体修飾節が場所名詞句を含んでいない

にもかかわらず、「ある」「いる」による修飾が可能である。

(27) a. 家があったあたりを見ると、風呂屋の煙突、ブロック塀、蔵、さらによく見れば、かなりある金庫らしき突起、庭燈籠、ほかに何もない。
（KOTONOHA、下線引用者）

b. 世論調査などの統計資料はあくまでも、たくさんある情報のひとつに過ぎない。（KOTONOHA、下線引用者）

(27) の例では、場所名詞句は明示的に現れることがなく、何らかの場所名詞句が含意されているとも考えにくい。それにもかかわらずこれらの例が容認されるのは、存在物の数量を表す要素「かなり」「たくさん」が付加されていることによると思われる。「ある」「いる」は存在以外の実質的な意味を持たないため、それがどこに存在するか、どのように存在するか、といった情報を付加しなければ連体修飾要素としての価値がない。場所名詞と数量詞はそのような情報を表す要素であり、それらを含む節のみが連体修飾要素として機能すると考えられる。

このような前提に基づいて、存在物を修飾する節での「ある」「いる」の生起を観察する。まず、場所名詞を含む連体修飾節である。

(28) a. * 台所にテーブルの上にある皿がある。

b. * 学校に教室にいる学生がいる。

c. * テーブルの上に財布の中にあるお金がある。

(28) の例が表そうとしている状況そのものは、それほど不自然なものではない。(28) a は、台所の中にテーブルがあり、そのテーブルの上に皿があるという状況であり、(28) b は、学校の中に教室がありさらにその中に学生がいるという状況であり、(28) c は、テーブルの上に財布があり、その財布の中にお金があるという状況である。ところが、このような状況は以下のような構文で表すことができないのである。

(29) * ［場所 1］に ［場所 2］に｛ある／いる｝［存在物］が ｛ある／いる｝。

次に、数量表現を伴う連体修飾節を見る。

(30) a. * 台所にたくさんある皿がある。

b. * 学校にたくさんいる学生がいる。

c. * テーブルの上に少しあるお金がある。

ここでも、表されようとしている事態そのものは不自然ではない。その証拠に、以下のような言い換えを行えば、(30) は容認可能な文になる。

(31) a. 台所にたくさんの皿がある。

b. 学校にたくさんの学生がいる。

c. テーブルの上に少しのお金がある。

したがって、(30) が容認されないのは、それが表す事態が意味的に不自然であるからではなく、以下のような構文が日本語では成り立たないからだと考えられる。

(32) *[場所名詞句] に　[数量表現] {ある／いる} [存在物] が　{ある／いる}

(29) と (32) の構文が共通しているのは、存在文において存在物を表す名詞句に対して、連体修飾節と主節の2つの存在動詞が述語づけられている点である。このことから、一般に日本語では以下のような構文上の制約が成り立っていると考えることができる。

(33) 主節が存在文である場合、存在物を表す名詞を存在文を使って修飾することはできない[4)]

この制約は、日本語では場所を表すニ格やデ格が一つの節に二重に現れることができないという一般的な制約の特殊な場合と言えるかもしれない。

(34) a. * 野良猫が家に床下に住みついている。

b. * 首相は毎晩ホテルでバーでカクテルを飲む。

3.3.2. 連体修飾節における「多い」「少ない」とその類義語類

次に、「多い」「少ない」が [名詞句2] を修飾する場合について検討する。

(35) a. * 生協の食堂に多い学生がいる。

b. * 図書館に多い専門書がある。

c. * 待合室に少ない患者がいる。

d. * グラスに少ないワインがある。

これらの例は、まさに仁田 (2010)、寺村 (1991)、木下 (2004) で問題にされてきたタイプの文である。これらの文が容認不可能になることから、主節が存在文である場合には、存在物を「多い」「少ない」で修飾することはできないことが分か

る。この点で、「多い」「少ない」は「ある」「いる」と同じ性質を持つと言える[5)]。

これに対して、「多い」「少ない」の類義語類については、存在物の修飾が可能である。

(36) a. 寺の境内におびただしい参拝客がいる。
b. 国会図書館には膨大な書物がある。
c. アフリカには希少な資源がある。
d. 財布の中にわずかな金がある。
e. 中近東には豊富な原油がある。
f. この会社には潤沢な資金がある。

また、言うまでもなく、以下のように一般の形容詞による存在物の修飾も可能である。

(37) a. チベットに高い山がある。
b. 冷蔵庫に冷たいビールがある。
c. 本棚に分厚い辞書がある。
d. 隣の家に怖い犬がいる。

したがって、存在物の修飾に関しても、「多い」「少ない」は「ある」「いる」と同じ性質を示しており、「多い」「少ない」の類義語類およびその他の一般の形容詞とは異なっている。

3.4. 存在を表す述語としての「多い」「少ない」

3 節では、存在文に関連して、「多い」「少ない」と「ある」「いる」の類似性を見てきた。その結果、存在文の述語としての生起可能性（第 3.1 節）、出来事存在文としての用法の有無（第 3.2 節）、主節が存在文である場合の存在物に対する修飾の可能性（第 3.3 節）、のいずれの場合にも、「多い」「少ない」は「ある」「いる」と同じ性質を示すことが分かった。このことは、「多い」「少ない」は単に数量を表すのではなく、存在の意味を含んでいるということを示している。そして、先行研究で問題とされてきた「多い」「少ない」による連体修飾の不自然さは、このことと (33) のような存在文の使用に関する制約から自然に説明される。

この分析は、これまでの内在的形容説で説明できなかった事実を説明できる。

すなわち、「多い」「少ない」の類義語類の振る舞いである。上の3つの現象に関して、「おびただしい」「膨大な」「希少な」「わずかな」などは、「多い」「少ない」ではなくその他の形容詞と同じ振る舞いをするが、これらは被修飾名詞の内在的性質を形容していないという点では「多い」「少ない」と同じであるため、内在的形容説に従うとそれらは「多い」「少ない」と同じ振る舞いを示すという誤った予測をしてしまう。それに対して、本稿の分析では、「多い」「少ない」は存在の意味を含むのに対してその類義語類は存在の意味を含まないと規定することで、これらの振る舞いの違いを正しく予測することができるのである。

4. 様々な構文における「多い」「少ない」

第3節では、「多い」「少ない」が存在文における存在物を指す名詞句を修飾することができないことを観察したが、仁田（2010）、寺村（1991）、木下（2004）で挙げられている例は存在文には限られていない。しかも、存在文以外の構文においては、「多い」「少ない」による連体修飾が可能な場合とそうでない場合が混在している。

本稿では「多い」「少ない」が存在を表す述語であるという仮説に基づいて、これらの装定用法の可否を説明するという立場を取っている。この主張の妥当性を示そうとすれば、存在文以外のすべての構文についてもこの仮説が成り立つことを確かめなければならない。そのためには、本来であれば、「ある」「いる」を中心とする存在を表す述語の装定用法についての一般的な分布制限をまず明らかにして、「多い」「少ない」の分布がその制限にしたがっていることを示す必要があるが、現在のところそのような分布制限を定式化するには至っていない。そこで、その前の段階として、まず以下の記述的一般化が成り立つことを示すことにする。

(38) 装定用法の「多い」「少ない」の可否は、それぞれ「多くある」「少ししかない」で置き換えた場合の可否と平行する。

これは、「多い」「少ない」が数量の多寡と存在の両方の意味を含んでいるという仮説に基づくパラフレーズである。もちろん、これは「多い」と「多くある」、「少ない」と「少ししかない」がそれぞれ全く同義であるということを主張するものではなく、連体修飾の「多い」「少ない」の分布を示すための一つのテストとし

てこのパラフレーズを利用するに過ぎない。もし、(38) の一般化が示されれば、「多い」「少ない」の装定用法の可否がその存在の意味に由来するという本稿の主張がより強化され、そうでなければ、疑わしくなるということになる。

検証に進む前に、「少ない」のパラフレーズとして「少なくある」ではなく「少ししかない」を採用した理由について簡単に述べておきたい。仁田（2010）でも述べられているように、「多い」は原則として連体修飾の位置に立つことはなく、その代わりに「多くの」が使用されることが多い。

(39) a. * 部屋に多い本がある。
　　b. 部屋に多くの本がある。

ところが、「少ない」の場合には「少なくの」という形を用いることはできず、その代わりに「少しの」という形式が用いられる。

(40) a. * 部屋に少ない本がある。
　　b. * 部屋に少なくの本がある。
　　c. 部屋に少しの本がある。

仁田（2010: 81）はこの現象について「「少ナイ」はそれ自身の装定形を有していない。(11)（≒（40）c、引用者注）の例が示すように別系統に属する「少シノ」を、補充法として、自らの装定用法としている形容詞である。」と述べている。本稿では、仁田（2010）のこのような観察に基づき、「少なく」という形容詞の連用形ではなく、「少し」という副詞をパラフレーズに用いることにする。

ところが、「少しある」を連体修飾として使用すると、多くの例が容認不可能になってしまう。

(41) a. * 少しある資源を大切にしよう。　（← 少ない資源を大切にしよう。）
　　b. ?? 少しある金をはたいて本を買った。
　　（← 少ない金をはたいて本を買った。）

一方、これを「少ししかない」に置き換えると容認度が上がる。

(42) a. 少ししかない資源を大切にしよう。
　　b. 少ししかない金をはたいて本を買った。

このような差が生じる原因は現段階では明らかでないが、さしあたっての目的は「多い」「少ない」を「数量表現＋存在述語」という形式で置き換えることが可能

かどうかを確認することであり、それが「少しある」であろうと「少ししかない」であろうとその目的にとっては差が生じない。したがって、より使用範囲の広い「少ししかない」を用いて検証を行うことにする。

では、(38) の一般化を検証していくことにしたい。以下で、仁田 (2010)、寺村 (1991)、木下 (2004) で挙げられた「多い」「少ない」を含む例をすべて列挙する。

(43) a. しらがの多い女の人が歩いて来た。　(仁田 2010: 83)
b. 髪の少ない男の人が座っている。　(同 : 83)
c. 少ない資源を大切にしよう。　(同 : 86)
d. 少ない資料で正しい結論を出すのはむずかしい。　(同 : 86)
e. 少ない金をはたいて本を買った。　(同 : 86)
f. 多い資源だからといって無駄に使ってはいけない。　(同 : 86)
g. (三つの中で) 多い方を取って下さい。　(同 : 88)
h. 少ない店員で能率的な経営をする。　(同 : 88)
i. * 多い人が庭に集まっている。　(同 : 79)
j. * 少ない本がある。　(同 : 81)
k. * 庭に多い人が居る。　(同 : 86)
l. * 庭に少ない人が居る。　(同 : 86)

(44) a. いちばん多い誤りは冠詞の使い分けです。　(寺村 1991: 261)
b. この辺りは大阪でいちばん映画館が多い所です。　(同 : 264)
c. この辺りではどんな事故が多いですか。
——そうですね、この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です。
(同 : 264)
d. 消費税が実施されてからどんな苦情がよくきますか。
——いちばん多い苦情は、日常品が高くなって贅沢品が安くなっていることのようです。　(同 : 264)
e. * この辺は多い映画館がありますね。　(同 : 260)
f. * きのう電車事故があって、すくない人がけがをしました。　(同 : 260)

(45) a. 日本で多い名字と言えば、鈴木、佐藤、山田などだけど、さて、アメリカ人に多い名字って何だろう。　(木下 2004: 28)

b. 職域で多い心の病気の種類。（同：28）

c. 灯のない街に昼間より多い人が出ている。（同：29）

d. 昨日より多い人たちで境内はにぎやか。（同：29）

e. 座り込みには普段より多い人たちが参加している。（同：29）

f. そのときはもうすでにいつもより多い人が電車に乗っていました。（同：29）

g. 約5万人の観客で埋め尽くされたすり鉢状のスタンドと大歓声。当時の一関市の人口が5000人ぐらい。それより多い人が1カ所にいるんだから。（同：29）

h. 車が次々入ってきて、思っていたより多い人だった。といってもまだまだスペースはあったけどね。（同：30）

i. * 多い人々が庭に集まっている。（同：31）

j. * 多い人たちが庭に集まっている（同：31）

これらには容認可能な例と容認不可能な例があるが、容認可能な例は「多くある」「少ししかない」で置き換えても自然なままであり、容認不可能な例はそれらで置き換えても不自然さが解消されない、という結果が得られれば、(38) の仮説が強化されることになる。逆に、置き換えによって容認可能性が変われば、(38) の仮説が弱められることになる。置き換えた結果は、以下の通りである。

(46) a. しらがの多くある女の人が歩いて来た。

b. 髪の少ししかない男の人が座っている。

c. 少ししかない資源を大切にしよう。

d. 少ししかない資料で正しい結論を出すのはむずかしい。

e. 少ししかない金をはたいて本を買った。

f. 多くある資源だからといって無駄に使ってはいけない。

g. (三つの中で) 多くある方を取って下さい。

h. 少ししかいない店員で能率的な経営をする。

i. * 多くいる人が庭に集まっている。

j. * 少ししかない本がある。

k. * 庭に多くいる人が居る。

l. * 庭に少ししかいない人が居る。

(47) a. いちばん多くある誤りは冠詞の使い分けです。

b. この辺りは大阪でいちばん映画館が多くある所です。

c. この辺りではどんな事故が多いですか。

——そうですね、この辺りで多くある事故は車と自転車の接触事故です。

d. 消費税が実施されてからどんな苦情がよくきますか。

——いちばん多くある苦情は、日常品が高くなって贅沢品が安くなっていることのようです。

e. * この辺は多くある映画館がありますね。

f. * きのう電車事故があって、少ししかいない人がけがをしました。

(48) a. 日本で多くある名字と言えば、鈴木、佐藤、山田などだけど、さて、アメリカ人に多くある名字って何だろう。

b. 職域で多くある心の病気の種類。

c. * 灯のない街に昼間より多くいる人が出ている。

d. * 昨日より多くいる人たちで境内はにぎやか。

e. * 座り込みには普段より多くいる人たちが参加している。

f. * そのときはもうすでにいつもより多くいる人が電車に乗っていました。

g. * 約5万人の観客で埋め尽くされたすり鉢状のスタンドと大歓声。当時の一関市の人口が5000人ぐらい。それより多くいる人が1カ所にいるんだから。

h. * 車が次々入ってきて、思っていたより多くいる人だった。といってもまだまだスペースはあったけどね。

i. * 多くいる人々が庭に集まっている。　（同：31）

j. * 多くいる人たちが庭に集まっている　（同：31）

上記の28例の中で、(46) のすべて、(47) のすべて、(48) a, b, i, j の合計22例については置き換えによって容認可能性の変化は見られなかった。したがって、これらの例については (38) の一般化が成り立つことが示された。

問題となるのは、(48) c–h の 6 例である。これらはすべて、「多い」では容認可能であるにもかかわらず、「多くある」で置き換えると容認不可能になってしまう。したがって、(38) の一般化に対する反例となる。これらの例について、現在のところ明確な説明を与えることはできないが、少なくとも以下の現象を指摘しておきたい。

(48) c–h は、木下 (2004) で「比較対象そのものが直接的に示された」とされる場合である。すなわち、「～より」によって比較の基準を明示し、それよりも数量が多いということを表現する構文である。筆者の直感では、このように「～より」を明示化した場合、「多い」を存在文で使用するとやや容認可能性が下がる。

(49) a. ? 図書館には昨日より人が多い。

b. ? 京都には奈良より寺が多い。

c. ? 廊下には部屋よりゴミが多い。

このことから、「～より」と共起することで、「多い」の存在の意味が薄れ、単に数量を表す表現になるのではないかと考えられる。(45) c–h における「多い」が容認可能なのは、そのためと考えることができる[6]。

このように、(45) c–h を除外して考えることができるとすれば、(38) の一般化に対する反例は少なくとも先行研究で挙げられた例文に関しては存在しない。このことは、「多い」「少ない」の装定用法の不自然さがそれに含まれる存在の意味に由来するという本稿の主張の妥当性を強く示唆するものと言える。

5. 「豊富だ」「潤沢だ」について

第 3.1 節で述べたように、「多い」「少ない」の類義語類のうち「豊富だ」「潤沢だ」は、存在文の述語として生起できる上に、存在文における存在物を修飾する用法も可能である。

(50) a. この国には資源が豊富だ。

b. この国には豊富な資源がある。

(51) a. IT 企業には資金が潤沢だ。

b. IT 企業には潤沢な資金がある。

この事実は、本稿の主張に対する反例となりうる。なぜなら、本稿の分析に基

づけば、存在文の述語としての生起と、存在文における存在物の修飾は両立しないことが予測されるからである。しかしながら、ここではこのような語の存在は本稿の主張に対する反例にはならないと考える。

まず、これらの語が存在文の述語として使われる場合の特徴として、その文がある物・人がある場所に存在するという純粋な存在の意味を表さない、という事実が挙げられる。例えば（50）aの文は、ある国に資源が多く存在しているというよりは、その国が資源が多いという特徴を持っているという解釈が優勢である。すなわち、この構文は単にある場所におけるある物の存在を表すのではなく、ニ格名詞句に対する属性記述になっているのである。

このことは、以下の現象から確かめられる。まず、これらの述語を持つ存在文では、ニ格名詞句は助詞ハを伴わなければならず、ハを削除すると容認度が下がる。

（52）a. ?? この国に資源が豊富だ。

b. ??IT企業に資金が潤沢だ。

このことは、ニ格名詞句が単なる場所を表すのではなく、述語によって属性記述が行われる主題でなければならないということを示唆している。また、ニ格名詞句に「～の中」「～の奥」などの位置を表す形式名詞を付加すると容認度が下がる。これは「多い」「少ない」とは対照をなしている[7]。

（53）この倉庫の中には資料が｛多い／?? 豊富だ｝。

この事実もまた、ニ格名詞句の指示対象が単なる場所ではなく、属性記述が行われるにふさわしい実体としての性質を持たなければならないことによると思われる。

これらのことから、これらの語が述語として現れる場合は、「AにはBが[述語]」という形式を持っていたとしても、その文は純粋に存在を表すものではなく、したがって、述語は必ずしも存在を表すものでなくてもよい。このように考えれば、「豊富だ」「潤沢だ」が存在文における存在物を修飾することができるのは、それらが存在の意味を含んでいないためだと考えることができる。

6. 結語

本稿では、「多い」「少ない」の装定用法について、従来の内在的形容説の不備を指摘し、それに変わるものとして、それらに存在の意味が含まれているという

仮説を提示し、それによって従来の分析では説明できなかった「多い」「少ない」とその類義語類の振る舞いの違いが適切に説明できるということを示した。

ここで、「多い」「少ない」になぜ存在の意味が含まれるかについて、英語の数量表現と対照しながら筆者の推測を述べておきたい。日本語の「多い」「少ない」を英語に訳する場合、真っ先に念頭に浮かぶのはそれぞれ *many* と *few* という語であろう。ところが、寺村（1991）も指摘するように、装定用法と述定用法という観点からすると、*many* と *few* は「多い」「少ない」とはちょうど反対に分布する。すなわち、*many* と *few* は装定用法（英語学では限定用法と呼ばれる）での使用がほとんどであり、述定用法（英語学では叙述用法と呼ばれる）としての使用は比較的まれであり、通例堅い古風な言い方で用いられるとされる（小西編 1989）。このことから、*many* と *few* が使われている英文を日本語に翻訳する場合、装定用法から述定用法への書き換えが必要となる場合が多い（以下の対訳例は、いずれも『英辞郎 on the WEB』から採集したものである）。

（54）a. Many people associate hearing loss with getting older.
　　b. 難聴というと、加齢による問題だと考える人が多い。

（55）a. Many people fail to understand the implications of this Japanese word.
　　b. この日本語の言外の意味を理解できていない人が多い。

（56）a. Few understand what the daily situation is for people in the country.
　　b. その国の人々が日々どのような状況に置かれているのか、理解している人は少ない。

（57）a. Few people know it.
　　b. それを知っている人は少ない。

もちろん、「多くの」「少しの」を使って装定用法として訳すこともできなくはないが、日本語としてはややこなれない表現になりがちである。実は、このような傾向は *many* や *few* に限られたものではなく、*some* と *no* についても名詞修飾語として使われている場合、その日本語訳はそれぞれ述語「ある／いる」と「ない／いない」で表現されることが多いようである。

（58）a. Some become angry when it doesn't work out as planned.
　　b. ことが計画通りにいかないと怒りだす人もいる。

（59）a. Some Europeans hope to emulate the American motto.

b. アメリカのモットーを見習おうというヨーロッパ人もいる。

（60）a. No one could predict the collapse of the Berlin Wall.

b. ベルリンの壁崩壊を予言できた人はいない。

（61）a. Nobody works without a retainer.

b. 依頼料無しで働く人はいない。

このことは、英語が数量を装定で表現する傾向が強いのに対して、日本語はそれを述語で表現する傾向が強い言語であることを示していると言えよう。「多い」「少ない」のような数量を表す語が存在の意味を伴って述語で用いられるのはそのような傾向によるものと考えられる。

7. 残された問題

最後に残された問題を挙げておく。まず、第4節で扱った様々な構文における「多い」「少ない」の装定用法の可否に関する問題が挙げられる。そこで述べたように、本稿ではパラフレーズによる置き換えの可否という記述的一般化を示したに過ぎず、その可否がどのような原理に基づいて生じているかを明らかにすることはできなかった。これについては、存在文の機能の問題、名詞句の定性の問題など、考察すべき点がいくつか予想されるため、今後一つ一つ検証していきたい。

また、本稿で明らかにした現象は「多い」「少ない」の意味をどのように表示するかという問題にもつながっている。従来の数量詞研究では、これらを論理的な量化表現の観点から扱うことが多かったように思われる。ところが、もし本稿の分析が正しければ、「多い」「少ない」は単なる量化表現ではなく、存在の意味も含んでいることになり、それに対してどのような意味表示を与えるかが大きな問題となる。やや立ち後れているとも言える形容詞の意味表示の問題も含めて今後考察していく必要があるだろう。

さらに、本稿では「多くの」「少しの」といった「副詞＋の」という形式については全く扱わなかったが、これらが意味的にどのような特徴を持っているかを明らかにする必要がある。従来、これらの表現については数量詞遊離という観点からの多くの研究があるが、本稿での分析がそれらの研究とどのように関わって

いるかを検討していきたい。また、先行研究では「多い」「少ない」だけでなく、「遠い」「近い」も平行的に扱われているが、本稿ではそこまで考察の範囲を広げることができなかった。この点についても今後の課題としたい。

註

1）本研究は、第10回言語研究会（2010年4月24日、於豊中市千里公民館）での研究発表「『*多い人がいる』という表現をめぐって」、及び、第11回日本語日本文化教育研究会（2011年7月9日、於大阪大学日本語日本文化教育センター）での研究発表「『多い／少ない』の装定用法に関する諸問題」に基づいている。席上、有益な質問やコメントをいただいた参加者に感謝の意を表したい。

2）仁田（2010）のうち、本稿で参照したのは「第1部 第5章 形容詞の装定用法―「多イ」をめぐって」である。これは、もともと『文芸研究』85集（1977）に掲載された論文の補訂版である。また、仁田（2010）では、用例が漢字片仮名交じり文で表記されているが、本稿で引用する際には、表記の統一のため漢字平仮名交じり文にした。

3）本稿での用例の一部は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から採録している。それらの用例については、「(KOTONOHA)」によって示した（http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/）。

4）「テーブルの上にいつもは戸棚の中にある包丁がある」のような例は容認可能であるが、これは「テーブルの上にいつもは戸棚の中にあるはずの包丁がある」という意味であり、包丁がテーブルの上と戸棚の中に同時に存在するということを表す文ではない。(33) の制約はこのような文に対しては当てはまらない。

5）「多い」「少ない」を述語とする連体修飾節は、「ある」「いる」と異なり、数量表現を付加することはできない。これは意味的観点から自明のことである。一方、場所名詞を付加することは可能であり、その場合には「この近所には九州に多いコンビニがある」のような適格な文になる場合もある。このような例は（33）の制約の例外と考えられるかもしれないが、必ずしもそうとは言えない。上の文は、全く同一のコンビニ店舗が九州にもこの近所にもあるということを意味しているのではなく、九州に多いタイプのコンビニのトークンがこの近所に存在しているということを意味している。このような例において名詞句の指示対象をどのように記述するべきかは興味深い問題であるが、本稿ではこれ以上の議論はせず、稿を改めて考察したい。

6）このような例が完全に容認不可能にならないのは、「京都は奈良より寺が多い」と

いう構文の干渉があるためとも考えられる。「Aは（Bより）Cが［述語］」という文は存在文ではないため、存在を表す述語が生起する必要はない（例えば、「中国は日本より面積が大きい」「太郎は次郎より目が大きい」）。筆者の直感では、「京都には奈良より寺が多い」という文は「京都は奈良より寺が多い」という文や、比較の基準がない「京都には寺が多い」という文より容認度が低い。

7）「潤沢だ」については、そもそも存在物名詞に具体物をとることがなく、「資金」「在庫」「予算」「費用」などの抽象物としか生起しない。このことも、「AにはBが潤沢だ」という文が典型的な存在文ではないことを示している。

参考文献

木下りか（2004）「形容詞の装定用法をめぐる一考察―「多い」「遠い」の場合」.『大手前大学人文科学部論集』5.

金水　敏（2006）『日本語存在表現の歴史』. ひつじ書房.

小西友七編（1989）『英語基本形容詞・副詞辞典』. 研究社出版.

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』. くろしお出版.

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』. 明治書院.

仁田義雄（2010）「第1部 第5章 形容詞の装定用法―「多イ」をめぐって」.『日本語文法の記述的研究を求めて』（仁田義雄日本語文法著作選　第4巻）. ひつじ書房.

野村剛史（2003）「存在の様態―シテイルについて」.『国語国文』第72巻8号. 京都大学文学部国語学国文学研究室.

Ostrovskaya-Nemkovich, Maria（2011）「言語類型論的観点から見た日本語の存在表現について」. 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.

〈キーワード〉存在文、数量表現、装定用法、述定用法

On the Nature of Japanese Quantificational Adjectives *ooi* 'many' and *sukunai* 'few'

—An Analysis in Terms of the "Existence" Sense—

Shinobu IMAI

In this paper, we deal with two Japanese adjectives, *ooi* and *sukunai*, which roughly mean 'many' and 'few', respectively. Others (Nitta 2010, Teramura 1991, Kinoshita 2004) have pointed out that these two adjectives cannot be used attributively in some cases, but they can in others, for example when *mottomo* 'the most' is added. All three researchers attribute this property to the meaning of these two adjectives allowing them to describe the number of the modified noun but not the noun's inherent properties, such as its shape, color or size.

We disprove this claim and argue that the acceptability of the attributive use of *ooi* and *sukunai* are determined by the inclusion of an "existence" sense. Through comparison of these adjectives with their synonyms, such as *obitadashii*, *boudai-na*, *houfu-na*, *juntaku-na*, *kishou-na*, and *wazuka-na*, which behave differently from *ooi* and *sukunai*, we show that *ooi* and *sukunai* are similar to the existential verbs *aru* and *iru*, but their synonyms are not, in that i) *ooi* and *sukunai* can appear as the predicate of an existential sentence, ii) they can be used in eventive existential sentences and iii) they can not modify a noun which denotes an existing entity in an existential sentence. Based on these observations, we argue that *ooi* and *sukunai* include an existence sense as one component of their meaning, which is not included in their synonyms.

With regard to the cases in which attributive *ooi* and *sukunai* are acceptable, we show the validity of a descriptive generalization as follows: If *ooi* and *sukunai* can be used attributively, then the expression *ooku aru* 'exist plentifully' and *sukoshi shika nai* 'exist only scarcely' also can be used; Conversely, if *ooi* and *sukunai* cannot be used attributively, then *ooku aru* and *sukoshi shika nai* also cannot. This fact strongly suggests that the existence sense included in *ooi* and *sukunai* determines the acceptability of the attributive use of these adjectives.